



発行日 2001年4月30日

発行人 藤川享胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 秋 太田 金子 菅原 館盛

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: <http://www.pa.airnet.ne.jp/szi>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.19



総会集合写真

CONTENTS

●巻頭 仏祖の心（慕古）を世界へ	大本山永平寺 貫首 宮崎 奕保	1
●特集 総会講演会ダイジェスト「宗教者、その国際性と、その必要性」		
国際会議の準備運営を感じること	横浜・東林寺住職 樹オフィス・タキタ代表取締役 瀧田 光久	2
「ゆめ観音 in 大船」アジアまつり 報告	SZI事務局「ゆめ観音 in 大船」担当 亀野 哲也	4
永平寺ワークショップ講演会ダイジェスト②「アメリカで生きる曹洞禅（下）」	パイオニアヴァレー禅堂 堂頭 藤田 一照	6
●海外レポート アメリカ発「北アメリカ開教師 雑感（2）」	北アメリカ開教師（ロサンゼルス禅宗寺）小島 秀明	9
●会員寄稿 ハワイ発 「別天地に移住して新しい人生を始めるまで（上）」	出川 成海	10
●会費納入者・寄付者リスト		11
●2001年度総会資料		12
●役員紹介		15
●曹洞宗大本山總持寺ワークショップご案内		16

巻 頭

仏祖の心（慕古）を世界へ

大本山永平寺 貫首 宮崎 奕保



新世紀を迎え、老衲は101歳という齢ながらも、難値難遇の道元禅師750回大遠忌の準備に当たることのできる御縁に唯々感謝申し上げる次第です。

道元禅師さまが中国から伝えられた正伝の仏法は、今や日本国内にとどまらず海外へも流布されています。これひとえに、海外開教に携わった皆様方の正法護持、祖道宣揚の道念の賜と慶仰に堪えません。打成一片の仏道が国境を越えた世界の人々に伝わり、世界の各地で只管打坐の参禅がなされていることは喜ばしい限りです。

我々は仏祖の古道を慕う心により、自ら坐禅に生きて自己を究明しなければなりません。そして、現代の仏法

者として世界で起こっている様々な社会的課題の解決に立ち向かわなければならないと考えます。「仏祖の心（慕古）を世界へ」という基本理念のもとに大遠忌事業の準備が着実に進められていますが、我々法孫として如何にしてその鴻恩に報いなければならないのか一人一人が考えなければなりません。

聞き及ぶところによると、スタンフォード大学での禅のシンポジウム、ゲーリー・スナイダー氏の詩の朗読などの文化事業も大成功裡に終えたということですが、SZIの皆様方のご協力に感謝いたします。道元禅師さまの教えは、世界のいろいろな人たちに新しい価値感を与え、宗派を超えて地球仏教として歩み始めているわけですが、人類と世界のために慕古のころを広めるようご尽力をお願い申し上げます。

特集／総会報告

「宗教者、その国際性と、その必要性」

～国際会議の準備運営をして感じること～

横浜・東林寺住職 (株)オフィス・タキタ代表取締役 瀧田 光久



瀧田老師

総会報告

さる2月6日、曹洞宗檀信徒会館において、2001年度SZI総会が開催された。出席者は40名。

椅子坐禅、開教師示寂者追悼会に続き、藤川会長による挨拶で総会は始まった。次いで、来賓として宗務庁教化部長吉田公雄老師、大本山永平寺大遠忌事務局次長青山嶺雲老師、同文化事業部長桜井孝順老師よりご挨拶をいただいた。

議事としては“2000年度の事業報告・会計報告・会計監査報告・役員改選・2001年度事業計画案・予算計画案”が報告・承認された。

引き続き瀧田光久老師による講演会が開催された。瀧田老師は僧侶であると同時に、日英同時通訳の第一人者であり、サミットなどの国際会議で歴代首相の通訳などを務められた経験を持たれる。興味深い講演の後、活発な質疑応答が繰り返され、それは総会後の懇親会においても同様であった。

* * * * *

総会講演会ダイジェスト

私は、「SOTO禅インターナショナル」とは、昨年末に「大船ゆめ観音」の行事に参加させていただきましたのが、最初のおつきあいであります。その折りに、この組織の皆様の活動に大変感動し、何かの機会に、私も参加させていただきたいことをお話しさせていただいておりました。こうして大変早くその機会に恵まれました

ことを、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。今後のこの組織のさらなる発展を強く希望しますとともに、私も協力をしていきたいと思っています。

自分の経歴を話すとき、何時も感じますのは、時代の大きな変化です。ある時は思想の変化、ある時は文化の変化と変遷、そして種々の我々を取り巻く諸技術の発展等々です。私がかつてサンフランシスコ紀伊国屋書店に勤務しておりました時、そこから日本に電話をかけるには、電話局に申込をし、二十数時間待たなければなりませんでした。今は、A-4の紙一枚がほんの数秒でニューヨークへ着いてしまう時代です。私たち僧侶は、この時代の変遷・情報のスピード化に合わせて、伝統を守りつつも変わっていかなければ「世の中」より取り残される状況にあることを認識しなければなりません。強調したいことの一つは、「情報の的確な、スピードのある入手を常に考えて“アンテナ”を高く上げておくこと」が大切であることです。

私は、この約二十年程、国際会議や展示会・国際スポーツ大会をプロとして準備・運営・実施するPCO(Professional Congress Organizer 国際会議準備専門家)として、政治・経済・科学・文学・医学等々及び種々の国際スポーツ大会を、主催者のご依頼の元に、その誘致から準備そして実施までの業務を仕事としておりました。簡単に言えば「会議屋」さんです。

最近の大きな仕事は、「九州・沖縄サミット」でした。PCOの仕事としては「サミット(頂上)」と表現されるように、この職業の中ではもうこれ以上の仕事はないと言えるような仕事です。当然やりがいのある仕事でした。世界のトップクラスの通訳を集めることができ、大成功の内に終了しました。「大成功」とは、仕事柄「何もクレームがなかった」ことであります。

通訳という仕事は、正確で間違いないことがまず第一なのです。もし間違いが生ずれば、この会議の性格上大変な問題になることは「火を見るより明らか」です。台本のない会議ですから、関係者は大変緊張しましたが、熱く燃えた日々を過ごさせていただきました。

次に三年程前の「長野オリンピック冬季競技大会」です。その二年程前より、同事務局へ参画させていただきました。まずは準備・運営の組織創りのご相談から始まり、最終的には、オリンピック期間中に開催されますIOC(国際オリンピック委員会)主催の会議(皆さ

んには直接的には見えないのですが、種々の会合があります）の同時通訳、多くの記者会見の通訳を行いました。特にメダリストの記者会見は、スポーツマンの晴れやかなすがすがしい姿を目の当たりにしながらの仕事でした。

そして、ボランティアの皆様が活動する場面を拝見し、正にこれがボランティアだと深く感銘。あの降りしきる白馬・スーパーGの競技場を午前一時より皆様が隊列を組んで、雪を踏み固める作業を黙々と朝五時過ぎまで続ける姿を…。また、私たち通訳がメダリストの会見の為、現地に到着すると、多くのボランティアの方々が我々の車を識別し、雪の中を最も近い場所まで誘導していただける姿、ころころ転びながらも一生懸命に走る姿等…「感銘」の一言です。そうした多くのボランティアに支えられての「オリンピック」を体験できることも、この仕事の喜びであります。IOC会長が、お帰りになる折に、長野駅で「Thank you, NAGANO. (長野ありがとう)」と繰り返し叫ばれておられたのが、大変印象的でした。私も、終了後長野を去る時、本当にそのように感じました。

「サミット」も「オリンピック」も、また多くの国際的な行事の成功の裏側で、多くの方々、ボランティアの方々や地元の方々、自治体・政府・関連団体の方々の協力、そしてその道のプロの活動がこうした感激を生むものと、経験上より確信しております。こうした方々と一緒に体験できるこの喜びこそ、PCOの喜びでもあります。

ここで申し上げたいことは、仕事・業務等々を通じて、私たちは何時も「感動・感銘・感激・喜び」を持つことです。これは、必ずしも「僧侶」だけのことではないのですが、僧侶である我々は、なおのことと確信しております。

私は、過去の述べました仕事の中でも、常に「世の中」の動きや変化に敏感であること、それに流されるのではなく、その流れや変化を確実に把握し、自分は「どうあるべきか」を自らに問うことを習慣としておりま



総会講演会出席の皆様

したが、現在僧侶としても全く同じ、否それ以上でありたいと思います。私たち僧侶は、常に情報収集の「アンテナ」を周辺に高く上げておく必要があります。新聞は勿論のこと、インターネットも当然その中に入ります。あらゆる手段を講じてのそうした行動は、現在の僧侶に必ず求められることと確信します。また、近隣の、或いは地域のコミュニティへの積極的な参加も絶対に必要と確信します。

私たち寺院僧侶は、いわば宗門のフロント、一番先端にあります。日頃多くの檀家様や地域の方々との交流があり、「指導者」的立場に立たされることが多いことは当然です。情報収集とその整理・消化に大きな「アンテナ」を持ち、僧侶として、社会の必要性に応えることが、大きな私たちの責務なのです。

次に「言葉」のことです。「言葉」は私たち人間にとりまして大切なコミュニケーションを司る道具であります。勿論日本人ですので、「日本語」を流暢に操る術を生まれながらにして習熟して今日に至っておりますが、この高度発展社会においては、そうした母国語だけでは、もう僧侶の世界においても事足りない状況であることはご存じの通りです。たまたま私は、過去の仕事により「英語」という道具に密接に巡り合い、それをどうしても習熟する必要性に迫られての中での修得でありました。しかし、諸般の状況により、私たち僧侶であります、こうした必要性はかつて私が経験したことと同様な現段階にあるのではないのでしょうか。高度発展社会での僧侶として、伝統は守りながらも、そうした技術・能力を持たないと、先に申した「世の中」の変化から取り残されることになるのではないかと危惧しております。檀家様のご家族に外国人が居られても不思議ではない現代の世の中です。現代を、二十一世紀を生きる僧侶として、少なくとも「英語」を取得することを改めてお勧めするとともに、私たちを取り巻く環境は、その必要性を訴えているように強く感じる昨今であります。

以上ご静聴ありがとうございました。



熱弁とユーモアの講演会

「ゆめ観音 in 大船」 アジアまつり報告

～ つながる ひろがる アジアのねがい ～

S Z I 事務局 亀野 哲也

去る11月25日、神奈川県鎌倉市の大船観音寺において、「ゆめ観音in大船」アジアまつりが開催されました。昨年に引き続き2回目、SOTO禅インターナショナルが主催参加という形では初めての開催となった「ゆめ観音」についてご報告いたします。

開催にいたる経緯

大船観音は鎌倉市内にありながら、いわゆる観光地としての鎌倉エリアから外れた位置にあります。そのため、拝観者数は鎌倉駅周辺の寺社の10分の1にも満たない状況です。しかし、拝観者のうち6割は篤い観音信仰の方々であり、幾度となくお参りをされています。また、境内に掲げられた絵馬や参拝ノートには、アジア各国の文字が目立つことも特色です。そこには健康を祈る言葉のほか「経済的に苦しい」「愛情が欲しい」など様々な願いが書き記されています。

在日アジア諸国の人々は、それぞれの悩み、思い、願い事を胸に観音様へと参拝を重ねているのです。いわば日本で暮らすアジアの方々の心のよりどころとなっているといえます。そこで、観音信仰で結ばれたアジア各国ゆかりの僧侶をお招きし、それぞれの国の様式で平和の祈りをささげ、音楽や舞踊を催し、ひとときでも楽しい時間を過ごしていただく場を設けることが出来ないだろうかということで企画されたのが「ゆめ観音」でした。

大船観音寺境内の白衣観音像は、もともと観音思想の普及とともに世界の恒久平和を祈願して建立されたものです。また、境内には原爆の火が燈されています。平和の願いを日本からアジア各国へ、そして世界へと広げていきたい。「ゆめ観音」アジアまつりでは大船の街を見下ろす白衣観音像の前にステージを設け、観音様に向かって平和の祈りをささげ、また観音様に抱かれな

がら民族芸能を奉納します。また、境内では各国僧侶が身の上相談に応じ、民族相互の交流も図られました。(第1回開催時、SOTO禅インターナショナルはスタッフ派遣という形で参加しています)

お祭りの準備

このたび開催された第2回「ゆめ観音」は、企画立案の段階からSOTO禅インターナショナルが関わりました。参加団体の拡充や規模を大きくしたため、初めて出演・参加をお願いする団体がほとんどとなり、従って、準備作業としてアジア各国の方々がかどのようなコミュニティーを形成しているのかを把握して、それから出演交渉を重ねていく作業からはじめました。けれども「ゆめ観音」開催の趣旨を、代表者と直接お会いして説明していく中で、皆一様に賛同していただけたというのはとても有難いことでした。

2000年という年は、例えば朝鮮半島に眼を向けると、南北首脳共同宣言が開催され、オリンピックの同時入場行進、ワールドカップの開催決定など、平和統一のワンステップを歩みだした年でした。身近なところでは、関東地方で初めての在日韓国・朝鮮関係者共同による「ハナ・フェスティバル」が川崎で大規模に開催されています。

今回の「ゆめ観音」の中において朝鮮民主主義人民共和国関係の団体も、大韓民国関係の団体も同じ一つのステージで法要や舞踊をおこなうことができたということは、このような礎があったという事実があったことに他なりません。

また、参加団体を探す上で、インターネットの存在というのも大きな役割りを果たしています。全国各地で開催されているアジアまつりの情報を収集し、その開催者



から出演団体を紹介いただくということもありました。

限られた時間ではありましたが、各団体との個別調整を行い、スケジュール、台本作成、プレス発表、役所への許認可、ポスターチラシ作成、舞台・テント準備、その他多くの作業を経て「ゆめ観音」当日を迎えることができました。



天候に恵まれた開催当日

「ゆめ観音」は、屋外で開催するお祭りですから、天候が成否を大きく左右します。幸いにも当日は11月下旬とは思えないほど暖かく、青空のもと、SZIスタッフは早朝より集合し、物資の搬送、ショップの準備などに携わりました。

祭典が始まると、境内には各国の音楽が流れ、とても賑やかな雰囲気の中、参詣者は絶え間なく訪れ、延べ1000人を越えました。日本人、アジアの方々以外にも西欧の方々が境内に目立ったのも印象的でした。普段あまり交流する機会がないアジア各国のコミュニティ、それを支える団体、そして各国ゆかりの僧侶それぞれが交流できる場を提供できたことで「ゆめ観音」の目的を概ね達成できたと感じます。当日の場内アナウンスは日本語と英語で行われ、境内は各国の言葉や民族衣装でとても華やかに彩られました。

舞台では、各国の平和祈願法要、民族舞踊の締めくくりとしてプロ和太鼓奏者の村上功・高田淳両氏による創作太鼓によりクライマックスを迎えました。観客一同その素晴らしい演奏に酔いしれ、惜しめない拍手のなかの閉幕となりました。

一つのお祭りを作り上げていくことは、数多くの人の協力が不可欠です。大本山總持寺監院老師、大船観音寺監寺・松山典生老師をはじめ、大船観音寺の徳永師、久米師、薄永師、職員の皆さん、舞台設営に助言いただいたオフィスTTSの藤本さん、司会進行に協力いただいた宗務庁の瀬野さん、青木さん、そして参加団体の皆様それぞれの力を合わせることで、無事円成させることができました。

今回の経験を踏まえて今年も第3回「ゆめ観音」開催に向けて準備中です。開催は11月24日を予定しております。今後も皆様のご協力、ご参加をお待ち申し上げます。

<http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/yume/>

D A T A

【出演団体一覧】（出演順）

- 曹洞宗韶音会（雅楽）
韶音会3名により、笙・箏・篳篥の三管を演奏した。
 - 大本山總持寺（平和祈願法要）
曹洞宗大本山總持寺より監院老師をお迎えし、平和祈願法要を行った。
 - 東京佛光山寺（平和祈願、民族舞踊）
台湾佛光山寺東京別院の僧侶による、平和祈願法要、法話。引き続き、観音様礼讃、崗物語の2つの舞踊を奉納した。
 - 久保田正也・久保田幸代（マントラ・古典舞踊）
インド全土を廻り、各種ヨガを学んだ久保田師によるマントラ、平和の祈り。引き続いて久保田幸代氏によるインド古典舞踊を奉納した。
 - 在日本朝鮮仏教徒協会（法話・平和宣言）
在日本仏教徒協会より僧侶をお招きし、平和祈願の宣言文を奉読した。また、事情に詳しい東林寺・瀧田光久老師に紹介、解説をいただいた。
 - 在日本朝鮮女性同盟神港・川崎支部チャンゴクラブ
 - 在日本朝鮮芸術家同盟神奈川支部舞踊部
力強いチャンゴの演奏、あでやかな朝鮮舞踊を披露。
 - ブスパ・ラトナ（バリ舞踊）
舞踊家、浜中洋美が指導するバリ舞踊グループによるきらびやかで美しいバリ舞踊。
 - クメールボランティア会（平和祈願・民族舞踊）
世界平和祈願法要、物故者供養の法要。引き続いてロバム・チュンポーという、世界の平和と幸福をお祈りする舞踊を奉納した。
 - ウリバラム（農楽）
韓国の代表的打楽器による躍動感あふれた収穫のお祭り。
 - 和太鼓・村上功・高田淳（和太鼓）
今注目の和太鼓奏者による繊細かつパワーあふれる創作和太鼓の演奏。
- ### 【出店】
- インド政府観光局（観光ガイド）
 - アショカ（インド料理）
銀座・インド政府観光局と同じビルにあるインド料理店。カレー各種を提供。
 - ネパリバザロ（民芸品・喫茶）
ネパールを中心としたアジア諸国の、ハンドクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることにより、現地での就業の場を拡大することを目指すフェアトレードショップ。立場の弱い人々、女性、子供の自立支援を目的とする。
（売上132,175円、内7割は商品開発・経費、3割は支援金）
 - 横浜ベトナム人会（軽食コーナー）
ベトナムの伝統的な麺料理と、揚げ物を提供。
 - We 2 1ジャパンショップ（リサイクルショップ）
アジアの女性たちの支援をめざすNPO「We 2 1ジャパン」のリサイクルショップ。店舗はボランティアで運営され、収益金は支援金に当てられた。
 - まけないゾウタオル販売
阪神淡路大震災に被災された方々により作られたゾウの形を模したタオルを販売。
（売上157,000円、内5割は義援金、5割は賃金＋経費）
 - バザー・リサイクル品販売
大船観音寺にお寄せいただいたリサイクル品を販売。
（97,000円を朝日新聞歳末義援金へ）

特集／永平寺ワークショップ講演会ダイジェスト②

アメリカで生きる曹洞禅（下）

マサチューセッツ州 パイオニアヴァレー禅堂堂頭 藤田 一 照



得度式の後で

皆さんが永平寺で行っていることは、禅という文化の継承と伝達だと思うんです。しかもその文化は一般の世間の人たちにとっては、文字通り「異文化」として体験されるようなものではないでしょうか。私が27才の時に、予備知識も何もなく鎌倉の円覚寺の接心に参加したときに、そこで出会ったのは、紛れもなく異文化としか言いようがないものでした。皆さんも初めて雲水としてここに上山された時、それまで慣れ親しんでいた世間の文化とは相当違う文化、生活様式に出会ったと感じたのではないのでしょうか。

仏教というのは本来ほとんどの人間にとってはまず、異文化として立ち現れてこなければならぬものです。アメリカの文化であろうが日本の文化であろうが、仏教から言わせると同じく世間の文化ですし、無明に基づいている文化です。一方、禅あるいは仏教というのは、世間の文化は結局のところ苦しみを生み出す文化であると根源的に批判してそれを乗り越えていく別な文化を提示しているのが仏教のほうなんです。単純に言うと、一方は自己陶醉する文化であるのに対して、禅というのは、自己陶醉から覚めていく方向に生きようとする文化なわけです。目覚めた者というのがブッダという言葉の意味なので、衆生の文化、世間の文化に対して仏の文化、あるいは出世間の文化といえると思います。異文化という言葉をごいう文脈で使うのは間違いかもしれませんが、禅をひとつの文化、目覚めの文化だと考えれば世間の人々にそういう文化をどう伝えるかというのは実は異文化間の理解として問題にできることなのではないのでしょうか。

異文化理解ということだと例えばアメリカ文化と日本文化の違いが話題になりますが、実はそういう空間的・地理的な意味での文化の違いよりも、自己陶醉にのめ

りこんでいく文化とどこまでも覚める文化という宗教的次元での文化の違いの方がはるかに大きくて、しかも我々にとって重要な意味をもつ問題ではないかと思うのです。ここで仏の文化を身につけてから、皆さんが自坊やそれぞれの持ち場に帰ったときにやることというのは、いま述べたような意味での異文化間コミュニケーションに関することなのです。お寺というのは本来出世間の文化と世間の文化とが会うところであるわけですし、永平寺の外は好むと好まざるとに関わらず皆さんのいるその場が異文化同志の緊張した接点ということになるのです。それが僧侶の本来ひきうけるべき宿命なのです。その点ではみなさんも海外の開教師とそんなに違った状況にいるわけではないのです。皆さん一人一人もいずれは異文化のはざまに立つ国内「開教師」になるわけです。ですから、海外の開教師が直面している問題というのは、結局はあなたたち全てに共通の課題となってくるわけです。永平寺で学び身に付けた仏の文化を、檀家さんや信者さんあるいは出会う全ての人たちにどうやって伝えていくかという課題、それは本質的にいわゆる開教師が海外でやっていることとそう違いはないはずなんです。ですからよく海外での開教はきっと大変でしょうねと言われるんですけど、実際は日本での開教も同じくらい大変なのではないのでしょうか。まあそれぞれの大変さの違いはあると思いますけれども。もしかしたらそれ以上に困難なのかもしれない。アメリカでは禅は二重の意味で異文化になるわけです。まず西洋文化とは異質な東洋文化の精華として。さらには世間の文化に対する出世間の文化として。しかし考えてみれば、今の西洋化した日本においては禅は一般の人達からそれと同じようなものとして見られているのかもしれませんが。もしそうなら禅は日本においても二重の意味で異文化となっているのです。むしろはっきりとそういう異文化として、今の主流の日本文化に対決・対峙する姿勢を打ち出すべきなのかもしれない私は思っています。今の禅は、長い歴史の中でいつしか世俗化の波に飲み込まれて、飼いならされて大人しくなりすぎているのではないのでしょうか。

* * * *

アメリカの仏教を概観したとき、一番目に付くのはその複雑さ、多様さです。南方仏教、大乘仏教、チベット仏教それぞれの各派が入り乱れて活動しています。アジアでは歴史的にそういう仏教伝統はほとんど交流もないままそれぞれの地域的で独自に発展してきました。ところが歴史上初めて文化のメルティングポット（るつぽ）と言われているアメリカで踵を接して存在しています。まさに仏教のスーパーマーケットのようです。初め



冬のヴァレー禅堂

て仏教に興味を持って、周りを見渡してみたアメリカ人は、この多様性に目がくらむわけです。仏教にこれほどにも色々な種類があるんだということはアメリカ人にとってはショックなわけで、一体どれが正当な仏教なのか。自分はどれを選べばよいのか。どれが本当なのかという混乱に陥る人が多いんです。中国で、教相判釈という交通整理が必要となったように、アメリカも今そういう状態になっているのではないかと思います。そういうところで活動しているものですから私は曹洞宗の独自性とはいったいどこにあるのかを考えざるを得ないんです。もし皆さんがアメリカに行った時に、「あなたは曹洞宗のお坊さんですね。曹洞宗とは何ですか、他の宗派とどこが違うのですか。簡潔な言葉で教えてください」と言われたらどうしますか。即座に明快な解答をあたえられますか。日本国内といったローカルなレベルだけでなく海外でもあるいはグローバルなレベルにおいても立派に通用し意義をもつような曹洞禅の独自性をどこに求めて、それをどう具体的な形として打ち出していくかという問題は、日本でも同じように要求されている緊急の課題です。それができなければ遅かれ早かれ時間の流れと共に淘汰され過去の遺物となっていくでしょう。いいかえればあなたたちと同世代のお坊さんではない友達に、お寺でお前面白いことやっているなあ興味を持って聞いてもらえるような、さらには彼らがそれに参加したくなるような、そういう曹洞宗の提示の仕方ができるかどうかという僧侶としての生き方を自分が創造できるかということです。

* * * *

私は坐禅とはたんなる精神鍛錬法ではなくどこまでも宗教的な行為だと思っておりまして、その深い宗教性を、ちゃんとわかってもらえるような言葉を使いながら、世間法のものではなくて、出世間法のものである（「坐禅は三界の法にあらず、仏祖の法なり」）ということこれからはっきりさせていかないと、曹洞宗の教えと実践がたんなる人生論と幸せに生きるテクニックになってしまっ、宗教としての曹洞宗本来の深さが理解されないのではないかと思います。日本からの見学者が

アメリカ人の修行者と会うと、たいてい彼らの熱心さに感心するんですけども、その熱心さもよく見てみると、しばしば道元禅師の言葉を借りれば、自己を運びて万法を修証するような熱心さなんですね。それを本人は気がついていない。無理ありません。それとは全然別の熱心さがあるということを教えとしてきいたことがないのです。確かに熱心、精進というのは大切なんですけども、仏教では正精進、正しい精進でなければ、いくら熱心であろうとも仏道修行になっていないという、非常に厳密さが要求されるのです。熱心にやればやるほど仏道からは遠ざかるということが確かにあるのです。今のアメリカの仏教はそここのところに僕は大きな落とし穴があると思っています。そういう微妙なところは本などではなかなか伝わらなくて、やはりここでのように24時間、実物見本になるような人たちと生活を共にするということが多かったら、なかなか伝わらないのではないのでしょうか。「面授」ということです。自分の物差しで目指したものを首尾よく手に入れるというのが修行の眼目ではない、では宗教的行とはどういうものであるのかということころをうまく伝えないとまったく見当違いの修行で一生を終わらせる羽目になってしまうのです。長年坐禅をやっているが人格的にはいっこう深まらないで変人の度合を増すだけという例もみえました。曹洞宗は特にそここのところを徹底的に問います。

南方仏教系のメディテーションセンターで初めて道元禅師の話をしたときに、宗門では耳にたこができるほど聞いている「修証一如」とか、「無所得無所悟」というようなことを言っても、聴衆はほとんどそういう発想をしたことがないし、そういう考え方を聞いたこともないと知って驚きました。そういう人達に向かって道元禅師門下としてはあくまで「坐禅は習禅ではない云々」と言わなければならないんですね。ある点では彼らの態度を真っ向から批判するように聞こえることも言わなければなりません。むしろそういうことを聞いたことも考えたこともないという人達にチャレンジする、挑むような形でやっているんです。もちろんそういうなかで彼らのほうから私の立場、ひいては曹洞禅に対する疑義も出されてくるわけです。いわばこういう他流試合のようなやり



ヴァレー禅堂 坐禅堂内部

取りは、私には刺激的で貴重な学びの場になっています。

* * * *

最後に、皆さんにお願いしたいことはせっかくこうして永平寺安居の機会を持てたのですからできるだけ深くこの文化を身につけて下さいということです。英語では embodiment というんですけど、体現する、体で現すこと。道元禅師の言葉で言えば「身現」ですね。べらべらしゃべって説明できなくなつて構わないんです。日本でであろう海外であろうがどこにいてもそこでその人が誠実に生きていれば、またその人の一挙手一投足、日々の生きている様子が法にかなったものであれば国の違いを超えてそれを見る人々に伝わるものがあるのです。最終的に人々を感化するのはそういうものではないでしょうか。要するに自分の生きていることそのものが曹洞禅の実例、実物となっている、そういうような身のつけ方をしてもらいたいと思うんです。それはなにも難しいことを要求しているのではないのです。ここで何世代にもわたって培われてきた文化を、素直に誠実に腰を入れて学ぶ、つまり差定に従って自分の身心のすべてを尽くしてやるべきことに取り組む、その工夫を日々積み重ねていく、それだけのことなのです。もちろん同時に、闇雲に伝統の形に固執するのではなくて、解体すべきことは大胆に解体して、まっさらな気持ちで原点に帰り、宗祖に帰り、その上で現代の状況にマッチした新しい曹洞禅の提示の可能性、あり方みたいなものを思い描いていただきたいのです。つまり伝統的禅文化の継承と新しい禅文化の創造の同時進行ということです。こういう不断の運動のなかにこそ禅の真髄があるはずです。自分は曹洞宗僧侶としてこういう風に生きたいなあとという将来の展望をさぐりながら、ここでの生活を意義を感じながら送ってもらいたいと願っています。

自分を試してみる場所としてアメリカは最適の場所のひとつだと思います。勿論チャレンジも多いし、大変で



ヴァレー禅堂への道

すが、是非志を高く持ってアメリカの禅センターなりグループなりに一定期間滞在して、自分の修行を異文化のなかにおいて試してみることを強くお勧めします。アメリカの修行者も日本からの刺激、人材を心から待望していますから、絶対歓迎してくれます。永平寺に限らず、曹洞宗の各僧堂で海外研修制度の道を開いて、真剣にやってみようと思っている人を海外に一定期間送り出せるような体制を作っていただきたいと思います。もっと踏み込んで開教師として曹洞禅を海外に向かって普く勧める運動の一翼を担う人がその中から出てくればこれ以上の喜びはありません。残念なことに教化研修所の海外布教コースというのが閉講中で学ぶ人がいないということを聞きました。グローバル時代の曹洞宗というスローガンを打ち出している宗門としては寂しいというしかありません。苦勞を厭わずに外に出て、力を試すという若い人材がどれだけいるかというのが宗門のバイタリティのバロメータになると思います。

まとまりのない話で申し訳ありませんでした。ご静聴を感謝申し上げます。最後になりましたけれども、こういう機会を与えてくださったSOTO曹洞禅インターナショナル、大本山永平寺、大遠忌局の皆様は心より御礼申し上げます。

合掌 九拝

S Z I 動静報告

2000年8月15日から2001年2月28日まで

2000年

9月 1日 「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」

案内状発送

9月 7日～12日

「道元禅師の足跡を訪ねて」中国ツアー

10月13日 「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」

駒澤大学記念講堂にて（永平寺主催
大遠忌事業・国際公開講座への協力）

10月25日 「北アメリカ・ハワイ檀信徒大会」

～31日 ラスベガス

11月25日 「ゆめ観音 in 大船」開催 大船観音寺

会報編集会議・事務局会 大船観音寺

12月 6日 会報18号発送

12月 8日 会報編集会議

中野 宗清寺

12月14日 役員会

曹洞宗檀信徒会館

2001年

2月 5日 役員会

曹洞宗檀信徒会館

2月 6日 総会

曹洞宗檀信徒会館

2月26日 会報19号編集会議

早稲田 大龍寺

* 会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行っております。

海外レポート アメリカ発

北アメリカ開教師 雑感（2）

北アメリカ開教師（ロサンゼルス禅宗寺） 小島 秀明

まるで町の公民館のように、毎週それぞれの曜日、時間帯によって、県人会やカラオケクラブ、華道クラスに文化刺繍、民謡や日本舞踊のクラス、書道会、ヨガ、着物の着付けなど18のクラブや団体が各々お寺に集まって来ます。また、これらの外部団体からの教室使用料と称するお布施も禅宗寺の財政の一助となっています。さらに、これらのクラスに参加される方々は知らず知らずのうちに、お寺や開教師と身近になってきて、お寺でイベントがあるときには、様々な形で助けてくれます。

この他にお寺で主催している活動があります。毎週土曜日の「茶道部」。アメリカでお茶と禅は切り離せません。年に一度茶筌供養を行います。この時は裏表流派の別なく一同に顔を合わせます。流派を超えて茶会ができるのはお寺ならではの「コンピュータークラス」は週2回。一昨年より現場に復帰した桑原先生が尽力し、お年寄りを対象に活発に活動しています。「ゲートボールクラブ」も結成されました。今まで疎遠になっていたお年寄りのメンバーさんが頻繁にお寺に来るようになりました。お寺に通う新しい理由や目的にもなっています。

若い親子を対象とした「寺子屋」というプログラムも週2回。日本の遊びを通して、学校では教わらない日本の生活文化を父兄一人ひとりが先生になって伝承しています。始まって3年目になりますが、口コミで広がって今では空きが出るまで待たないと入れなくなりました。初めの頃はお参りの時間や三分坐禅など一秒たりともじっとしていなかった子どもたちも、今では壁に向かって石のように坐っている子もいます。始めてきたときは寝返りもうてなかった乳飲み子が、お地藏さんの前で手を合わせてお参りしています。また、親も子どもとともに変わってきました。現在中心になっている30歳代は元来宗教に対して抵抗があり、設立当初はお参りや法話など興味ありません、という姿勢でしたが、それが今では子どもと一緒にとても楽しんでいるようです。お寺の中で活動するうちに、「宗教は胡散臭い」という概念が自然に「けっこう大切なことかも知れない」と変わっていくようです。



アメリカのお寺で七夕を楽しむ寺子屋のメンバー

「禅太鼓」は若者の和太鼓のグループで、これも週2回。今年で創立15周年を迎え、ロサンゼルスでも指折りのパフォーマンスグループに成長しています。こうなると引っ張りだこで、映画「チャーリーズ・エンジェル」などにも出ています。設立当初子供だったメンバーも今では大学生や社会人となり、今まで父兄に頼ってきた責任のある仕事もこなすようになり、世代交代を始めています。また、お寺の行事にも若手スタッフとして活躍している力強い存在でもあります。先人の開教師が蒔いた種が育ってきているのを実感します。その他、写経会や老人ホームへの法話慰問、学校などへの出張坐禅など数え上げるときがありません。

しかし、活動の中で中核をなすのはやはり、坐禅会です。永年継続して行われてきました。対象も限定されません。日系も非日系も関係なく、老若男女を問わない坐禅会は日系という枠を越えて北米の大地に仏教が根を下ろす鍵となっています。坐禅会の中から出てくる質問や問題は、文化や人種の枠を越えた人間としての普遍的課題であり、道元禅師の仏教が時代や文化を越えてその答えを示唆します。禅宗寺が多文化・他人種の中で日系と非日系の共存を可能にできたのも坐禅会という橋渡しがあったからでしょう。先祖崇拝的な家の宗教も自己実現を目指す個人の宗教も宗教的安心という点で求めるところは全く同じなのかもしれません。

活動自体は多岐に渡り、一つ一つを数えていくと通常の活動だけで570回前後が年間行われています。その中で、秋葉総監を柱に生身の開教師一人一人がそれぞれの持ち味を活かし、様々な活動を通して日常的に接し、共に悩んだり、問題を考えることで、体温を感じる生き方としての仏教が伝わっていくように感じています。



多くの聴衆の前でパフォーマンスする禅太鼓

海外レポート ハワイ発（会員寄稿）

別天地に移住して新しい人生を始めるまで（上）

S Z I 会員 出川 成海

平成12年3月28日、私は家内と猫2匹と共に沢山の書物を携えてハワイ島北部のカムエラという小さな町に移住しました。住み慣れた横浜の家を処分し、この太平洋の真ん中の小さな島で、禅仏教を通して自分の人生の見直しをするつもりでやってきたのです。

私が宗教に関わりを持ったのは、20歳の時の忘れ得ぬ体験がきっかけでした。私が盲腸をこじらせ腹膜炎で危篤状態となったのです。救急車で緊急入院し、手術が何とか間に合って一命を取りとめました。おまけに、入院中のある深夜、隣の病室で臨終間近らしい人を囲んでの家族達の悲痛な話し声や号泣が筒抜けに聞こえてきて、居たたまれない思いをしました。その人は明け方亡くなりました。この20歳の時の心臓が縮む様な体験から、自分自身も含めて人間の命が如何にはかないものかに気付き愕然としたのです。この体験は、精神的に未熟であった私にとりあまりに重すぎ、逡巡のあげく、あるキリスト教会の門を叩きました。結局、「神」が判らずじまいで失望したのですが、そのかわりのものを見つけました。当時私が通った教会には実存主義の文学者、哲学者達が集まり、キルケゴール、サルトル、ドストエフスキー等の論議にいつも花が咲いていました。わけの判らない「神様」よりこちらの方が私には余程魅力的でした。そのために以後、還暦を過ぎるまで文学や哲学の書物が私の人生の拠り所となり続けました。もし私がキリスト教会でなく、禅寺の門を叩いていたら、と今思います。

私は平成11年引退を果たすまでの45年間、貿易の仕事に従事してきました。昭和45年36歳のとき独立、文字や数字の表示装置（ディスプレイ）の将来性が大、との確信からディスプレイ専門の輸出商社をスタートしました。この会社がその後成長し、今では世界10か国に子会社を持つグループに発展、小規模ですが高い技術



フラダンス・フェスティバル 地元の知人夫婦と

力をもって欧米の産業界に根を下ろしています。この会社が30年も存続した主因は、選んだ専門分野が市場動向に適っていたことと、会社の財務基盤の強化にありました。たとえ業績好調であったとしても孤立無援の小企業、手形一本不渡りを食えば会社の屋台骨がゆらぐ、この不安解消の為に思い切った手を打ちました。昭和60年同じ不安を抱える英国の長年の取引先をパートナーとして合併し、英国に持株会社を設立、ロンドン証券取引所に上場をしたのです。日本では考えられないことですが、吹けば飛ぶような小企業でも必要条件を満たし審査にパスさえすれば、世界有数の大企業と肩を並べて上場できる、そこが英国市場の面白いところです。こうして市場から集めた資金を投入し、荒波に容易に転覆しない足場を固めました。それ迄に何回か倒産の危機に直面していますが、その都度最悪の事態を想定して覚悟を決めたものです。たとえ裸になって落ちぶれても、妻子を食わせるくらいはできる、あと書物と猫と焼酎さえあれば我が人生に充分、と真剣に考えました。毎日我が家の坐禅コーナーで中国天童寺でもとめた「無一物」という書を前に坐りますが、あのと時の真剣な覚悟を忘れまい、とのつもりです。大都会の喧噪の中に住み、ビジネスの泥沼に首まで浸かっていた私にとり、読書と共に大きな慰めとなり続けたのが登山でした。週末は必ず関東甲信越周辺の四季の山々と溪谷を歩き回り、特に南アルプス、中でも甲斐駒ヶ岳を大変愛していました。その為に、何とかして大自然の懷に住みたいという強い願望が芽生え育ち、後のハワイ移住の伏線となっています。

（連載 全3回の予定）



ハマクア・コーストの太平洋（出川夫妻）

第5回 「ハワイ・北アメリカ檀信徒大会」 報 告 飯 島 尚 之



(左)ハワイ町田開教総監 (右)北アメリカ秋葉開教総監
(中)南アメリカ三好開教総監

昨年10月29日、北米・ラスベガス・パレスホテルにて第5回「ハワイ・北アメリカ檀信徒大会」が総勢140人を超える参加者と共に開催され、ブラジルからも南アメリカ開教総監とその代表の参加があった。大会は全て英語で進められ、高祖道元禅師ご生誕800年慶讃法会、大竹明彦宗務総長からのメッセージ、峯岸正典師による初めての英語特派布教、記念講演、分科会等盛りだくさんの内容であった。

とりわけ分科会等の内容は、アメリカで展開される曹洞宗寺院、禅センターの活動が近未来の日本寺院、布教のあり方を示唆する事柄を多分に含んでいることである。例えば、核家族における宗教・信仰のあり方、寺院運営、檀信徒とお寺の関係等、ある面で海外での布教活動は宗門にとって極めて重要な情報源であると言える。海外布教の歴史はまだ100年。交通、情報伝達方法が加速化する世界、道元禅師の教えを未来につなげる行事にふさわしい記念大会であった。(SZI事務局)

寄付者・会費納入者名簿

■SZI会費納入者

新規会員並びに会員ご継続
ありがとうございました。
(敬称略・順不同)
2000年8月15日～2001年2月1日まで

青山俊董	名古屋市	愛知専門尼僧堂
秋央文	世田谷区	
秋田弘隆	静岡県	法幢寺
浅井宣亮	大府市	地蔵寺
飯島尚之	中野区	宗清寺
石井早苗	埼玉県	正覚寺
石塚良光	福井県	宗生寺
石田了丁	新潟県	宝台寺
石月聰明	郡山市	長泉寺
一適隆章	清瀬市	長源寺
伊藤秀一	秋田県	高岳寺
糸柳格順	静岡県	洞雲寺
岩田弘之	静岡県	満願寺
江川辰三	瀬戸市	宝泉寺
江口みさ江	江南市	天王町
大宅弘海	伊万里市	広厳寺
大嶽素宏	静岡県	宗清寺
大竹明彦	名古屋市	全隆寺
尾崎光昭	静岡県	弧雲寺
長田敬道	静岡市	洗耳寺
乙川良英	北蒲原郡	養広寺
小原智司	愛知県	西光寺
加藤大真	神戸市	最法寺
川村寿光	紋別郡	明光寺
吉川弘眼	新宿区	勝興寺
来馬宗憲	豊島区	清厳寺
黒川浩治	板橋区	
黒田征利	栃木県	瑞光寺
黒田武志	横浜市	善光寺
黒柳博仁	長野市	天周院
源 憲雄	羽生市	富徳寺
建咲院	山口県	
広教寺	山梨県	
小島宗光	伊万里市	本光寺
近藤俊貞	秋田県	円通寺
斉藤大等	山口県	福田寺

佐伯逸雄	愛媛県	興雲寺
篠田一法	名古屋市	長松院
篠原鋭一	千葉県	長寿院
島崎光雄	北海道	長林寺
珠泉院	足柄上郡	
祥雲寺	桐生市	
莊司和成	宮城県	柳徳寺
神龍寺	豊田市	
菅原研州	世田谷区	竹友寮内
寿松木宏毅	平鹿郡	永泉寺
高木乗正	成田市	永興寺
高崎直道	北区	静勝寺
田上太秀	世田谷区	
武田秀嗣	富士見市	興禅寺
田中俊光	名古屋市	大光院内
角田泰隆	世田谷区	
出川成海	横浜市	
洞雲院	知多郡	
富尾智恵	海部郡	松月寺
鳥澤俊寛	神奈川県	泉秋寺
中村泰潤	西津軽郡	全竜寺
JTB営業部	営業一部	
橋本英樹	熊谷市	見性院
連池泰乗	鶴岡市	宗伝寺
篠本宏昌	豊島区	泰宗寺
吹田英樹	青森市	常光寺
三浦賢翁	行田市	興徳寺
篠島伸悦	長野県	観音寺
藤沢好文	秋田市	歓喜寺
堀口良允	港区	正山寺
前田有全	滋賀県	慈眼院
松浦泰俊	富山県	自得寺
松本誠諦	秋田県	
満友寺	男鹿市	大竜寺
三浦賢翁	登別市	透禅寺
峯田弘道	群馬県	東善寺
村上泰賢	港区	玉鳳寺
村山正己	静岡県	宗徳院
山崎季晟	横浜市	
山田茂雄	山形県	清林寺
渡辺禅悦	愛知県	一心寺
渡辺亮正	静岡県	栄林寺
櫻井孝順	横浜市	東林寺
瀧田光久		

大船観音寺	神奈川県	
長禅寺	秋田県	
大善寺	横須賀市	
大瀧宗	徳山形県	持地寺
宮崎愼元	愛媛県	宝珠寺
中江一晴	愛媛県	興禅寺
宇野尚英	愛媛県	瑞光寺
石川順之	京都市	詩仙堂丈山寺

大船観音寺	神奈川県	
長禅寺	秋田県	
大善寺	横須賀市	
大瀧宗	徳山形県	持地寺
宮崎愼元	愛媛県	宝珠寺
中江一晴	愛媛県	興禅寺
宇野尚英	愛媛県	瑞光寺
石川順之	京都市	詩仙堂丈山寺

■SZI特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。
(敬称略・順不同)
2000年8月15日～2001年2月1日まで

JTB東京西支店	世田谷区	
角田泰隆	山口県玖珂郡錦町	
福田寺	行田市	長光寺
福島伸悦	横須賀市	東林寺
瀧田光久	熊谷市	
JTB営業部	千葉県	見性院
橋本英樹	愛媛県	長寿院
篠原鋭一	富士市	宝珠寺
宮崎愼元	新宿区	永明寺
加藤孝正	静岡市	東長寺
瀧澤和夫	秦野市	般若寺
藤川享胤	江南市	栄林寺
桜井孝順	名古屋市	泉秋寺
鳥澤俊寛	名古屋市	天王町
江口寿さ江	名古屋市	長松院
篠田一法	富士見市	興禅寺
武田秀嗣	山口市	
法龍寺	永平寺大遠局	
永平寺大遠局	清水市	宗徳院
松永然道	豊島区	祥雲寺
西沢応人	相模原市	梅窓院
館盛寛行	静岡市	山王寺
青山嶺雲	横浜市	善光寺
黒田武志		

SOTO 禅 インターナショナル 2001年度 総会日程

会場	曹洞宗檀信徒会館	3 F 「菊の間」・「蘭の間」
日程	2001年 2月6日 (火)	
	午後	1:30 受付開始
		2:00 開教師示寂者追悼会
		2:10 総会
		3:00 講演会
		演題 「宗教者、その国際性と、その必要性」
		講師 瀧田光久 (たぎた こうきゆう) 先生
		横浜・東林寺住職 (株) オフィス・タキタ代表取締役
	4:00	質疑応答
	5:00	懇親会 記念撮影
		以上

2001年度 総会次第

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 来賓挨拶
4. 議長選出
5. 議 事 (報告・承認事項)
 - 2000年度事業報告
 - 2000年度会計報告
 - 2000年度会計監査報告
 - 役員改選
 - 2001年度事業計画案
 - 2001年度予算計画案
 - その他
6. 閉会の辞

事務局長
会 計
監 事
事務局長
会 計

以上

2000年度 SZI 活動日誌

(2000年1月1日～12月31日)

1月 4日	総会案内発送	
1月14日	役員会	曹洞宗檀信徒会館
2月 1日	会報16号発送	
2月14日	SZI 総会・懇親会	曹洞宗檀信徒会館
3月29日	南アメリカ開教総監三好晃一老師壮行会	大本山永平寺
4月13日	ワークショップ打ち合わせ	駒澤大学
4月24日	会報編集会議	
4月24日	役員会	
5月16日	会報編集会議	曹洞宗檀信徒会館
5月22日	役員会・大谷有為師一時帰国懇談会	
6月20日	会報17号発送	
6月28日	役員会	福井ユアーズホテル
6月29日	SZI ワークショップ	大本山永平寺
7月12日～20日	「国際安居」	熊本県聖護寺
7月17日	「ゆめ観音」打ち合わせ	曹洞宗大船観音寺
7月27日	永平寺主催 大遠忌事業「禅といま」	
～29日	夏期大学講座へ協力	曹洞宗檀信徒会館
9月1日	「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」案内状発送	
9月7日～12日	「道元禅師の足跡を訪ねて」中国ツアー	
10月13日	「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」	駒澤大学
	永平寺主催 大遠忌事業・国際公開講座への協力	
10月25日～31日	「北アメリカ・ハワイ檀信徒大会」	ラスベガス
11月25日	「ゆめ観音 in 大船」開催	曹洞宗大船観音寺
	会報編集会議・事務局会	曹洞宗大船観音寺
12月 6日	会報18号発送	
12月 8日	会報編集会議	中野 宗清寺
12月14日	役員会	曹洞宗檀信徒会館

* 会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行っております。

以上

2000年度SZI事業報告

・研究・自己研鑽事業

2月14日 講師 足羽興志子先生 一橋大学 社会学部助教授
演題 「仏教の新たな可能性と異文化理解」
於 曹洞宗檀信徒会館「蘭」の間

6月29日 講師 藤田一照師 米国ヴァレー禅堂 堂頭
演題 「アメリカで生きる曹洞禅」
於 大本山永平寺

7月27日 永平寺主催 大遠忌事業「禅といま」
～29日 夏期大学へ参加
曹洞宗檀信徒会館

9月7日 「道元禅師の足跡を訪ねて」 中国ツアー
～12日 駒澤大学副学長 大谷哲夫師
スタッフ2名参加

10月13日 永平寺主催 大遠忌事業
「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」 参加
駒澤大学

・布教協力支援事業

7月12日 熊本県 聖護寺「国際安居」
～20日 スタッフ1名派遣
7月27日 永平寺主催 大遠忌事業「禅といま」
～29日 夏期大学へ協力 スタッフ4名派遣
10月13日 永平寺主催 大遠忌事業 曹洞宗檀信徒会館
「ゲリー・スナイダー 禅を詩う」 駒澤大学
11月25日 大本山總持寺・大船観音寺・SZI共催
スタッフ13名派遣
曹洞宗大船観音寺
「ゆめ観音 in 大船」

・海外・交流事業

10月25日 「北アメリカ・ハワイ檀信徒大会」 参加
～31日 スタッフ1名派遣
ラスベガス

・出版事業

SZI会報発刊 16号(1/30)、17号(6/20)、18号(11/15)

・広報事業

SZIホームページの運営

以上

SOTO禅インターナショナル2000年度収支決算書

総収入金 4,749,588 円
総支出金 4,552,719 円
差引残高 196,869 円

収入の部

項 目	当該年度予算	当該年度決算	増 減	備 考
会費収入	2,500,000	2,580,000	80,000	年会費
事業収入	900,000	365,000	△ 535,000	総会会費等
助成金	1,000,000	1,000,000	0	阿本山
雑収入	500,000	800,715	300,715	利子、添菜
繰越金	3,873	3,873	0	前期繰越金
計	4,903,873	4,749,588	△ 154,285	

支出の部

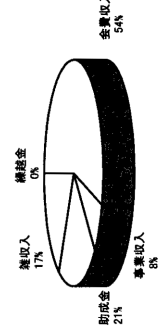
項 目	当該年度予算	当該年度決算	増 減	備 考
開教支援積立基金	1,200,000	900,000	△ 300,000	定期貯金として積立
事業費	1,600,000	1,603,560	3,560	講演会、ゆめ観音、聖護寺派遣費、檀信徒大会経費、中国ツアー参加費他
印刷費	100,000	30,141	△ 69,859	各種印刷費
会報費	900,000	1,041,421	141,421	会報印刷、発送費、編集会議
会議費	400,000	461,044	61,044	各会議費、会議交通費支弁
事務費	200,000	181,902	△ 18,098	事務連絡費、消耗品費、振込手数料
通信費	400,000	179,601	△ 220,399	電話代、郵便料金
備品費	30,000	0	△ 30,000	
予備費	23,873	143,500	119,627	三好先生経別他
渉外費	50,000	11,550	△ 38,450	
計	4,903,873	4,552,719	△ 351,154	

○開教支援積立金 (定期貯金・前年度迄) 8,000,000 円
(本年度積立額) 900,000 円
(定期貯金・本年度累計額) 8,900,000 円

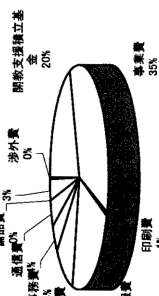
上記の通り決算書を提出いたします
会計 2001年2月6日
監査意見書 鶴野 哲也 ㊟

上記の通り相違ありません。 監事 細川 正善 ㊟ 西沢 広人 ㊟

収入内訳



支出内訳



2001年度 役員並びに事務局員 (案)

会長	藤川享胤	相談役	松永然道・采川道昭
副会長	滝沢和夫・福島伸悦		
事務局長	飯島尚之	事務局次長	黒柳博仁
会計	亀野哲也	監事	細川正善・西沢応人
事務局員	長田敬道・加藤孝正・浅井宣亮・秋 央文・舘盛寛行・金子宗元 大谷有為 (ハワイ) ・菅原研州・太田賢孝		(敬 称 略)

2001年度 事業計画 (案)

活動テーマ 「協働」

- 1) 宗門諸行事に国内外を問わずスタッフを派遣。
昨年に引き続き、大遠忌事業 (国際・文化) への協力。
- 2) 「ゆめ観音 in 大船」企画運営。
- 3) ワークショップの開催
日時 6月30日 (土) 午後を予定
会場 大本山總持寺
特別法要 開教師示寂者・寺族追悼会・世界平和祈願法要
講師 杉原千畝夫人 杉原幸子
演題 「六千人の命のピザ」
- 4) 人材育成、交流を目的とした海外スタディツアーの企画運営。

5) 講演会の開催

日時	2月6日 (火) 午後3時
会場	曹洞宗檀信徒会館「菊の間」
講師	瀧田光久老師
演題	「宗教者、その国際性と、その必要性」

- 6) 会報の定期発行 (年3回を予定)
19号 (3/下旬) ・会報20号 (8/上旬) ・会報21号 (12/下旬)

- 7) ホームページ運営
- 8) 曹洞宗海外寺院ガイド・ブックレット編集事業の推進
- 9) 評議委員会の設立

以上

SOTO禅インターナショナル2001年度収支予算書 (案)

総収入金 4,996,869 円
総支出金 4,996,869 円
差引残高 0 円

収入の部

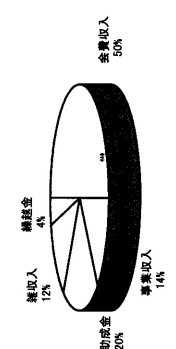
項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
会費収入	2,500,000	2,500,000	0	年会費
事業収入	900,000	700,000	△ 200,000	総会費等
助成金	1,000,000	1,000,000	0	同本山
雑収入	500,000	600,000	100,000	利子・漆菜
繰越金	3,873	196,869	192,996	前年繰越金
計	4,903,873	4,996,869	92,996	

支出の部

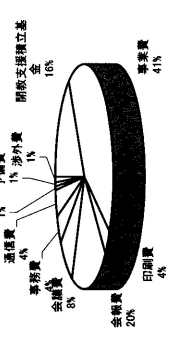
項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
開教支整積立基金	1,200,000	800,000	△ 400,000	定期貯金として積立
事業費	1,600,000	2,100,000	500,000	シンポジウム、ゆめ観音、講演会、聖護寺派道、中国ツアー等
印刷費	100,000	200,000	100,000	各種印刷費
会報費	900,000	1,000,000	100,000	会報印刷、発送費、編集会誌
会議費	400,000	400,000	0	各会議費、会議交通費支弁
事務費	200,000	200,000	0	事務運給費、消耗品費、振込手数料
通信費	400,000	200,000	△ 200,000	
備品費	30,000	30,000	0	
予備費	23,873	26,869	2,996	
渉外費	50,000	40,000	△ 10,000	
計	4,903,873	4,996,869	92,996	

上記の通り予算書を提出いたします
2001年2月6日
SOTO禅インターナショナル 会計 亀野 哲也

収入内訳



支出内訳



■ ■ ■ ■ S Z I 新役員紹介 ■ ■ ■ ■



新会長
山形県般若寺 住職
藤川享胤

「不易流行」

SZI会員の皆様におかれましては、つつがなく21世紀の初春をお迎えのことと存じます。

平成5年宗門の海外布教の促進に寄与し、会員相互の親睦を図る為に設立した当会も会員の皆様の御支援により創立10周年に向けて、新たなる第一歩を踏み出す事が出来ました。この間、両大本山におかれましては毎年過分なる補助金をご配慮下さり、物心両面に亘り心強いご支援をいただいております事に、衷心より御礼申し上げる次第であります。

扱、今年度の総会も去る2月6日東京グランドホテルにて開催され、無事円成する事ができました。特に今年度は役員改選の年でありましたが、不肖私が次期会長に再任され、福島、滝沢両副会長、飯島事務局長体制の下、次なる役員共々力を合わせ会の運営を行って参りたいと存じております。会員の皆様には更なる御高配を賜ります様伏してお願い申し上げます。

SZIは昨年は永平寺様で、一昨年は總持寺様に於いてワークショップを開催致しました。その研修会で私は大衆の皆様に「不易流行」という言葉を引用し、大本山という歴史と伝統という看板に安住し、ここに安居したという事実だけを重んじて吾魂を洗い直すことを忘れた僧侶は生き残ることが出来ないでありましょう。本山で学ぶこと(不易)が悪かろうはずがない。しかしそれがそのまま社会に通用するか、そしてそのこと全てを今日多くの人々が真に欲している事なのか、特に21世紀の僧侶は「流行」という時代の風潮に敏感で現実の世に受け容れられる生命力を持たなければならない事を強調してまいりました。

そういう観点からSZIの過去を振り返り、これから先の進むべき道を考えるにあたってやはり思考の軸足になるのはSZIにとって「不易」とは「流行」とは何かであります。

SZIにとって「不易」とは世界に通用する質の高い宗門人の育成であります。

さすればSZIにとって「流行」とは？

それは民衆が宗派を超えて求めている随機の説法の実践であります。その為にSZIはこの一年活動をしてまいりました。そして次年度も企画したプログラムに我々自身が参画し、少しでもレベルアップをして参りたいと思っております。 合掌



相談役
静岡県宗徳院 住職
松本然道



相談役
山形県宝泉寺 住職
采川道昭



副会長
東京都東長寺・天龍寺 住職
瀧澤和夫



副会長
埼玉県興徳寺 住職
福島伸悦



事務局長
東京都宗清寺 副住職
飯島尚之



事務局次長
長野県天周院 副住職
黒柳博仁



会 計
神奈川県貞昌院 副住職
亀野哲也



事務局員
静岡県洗耳寺 副住職
長田敬道



事務局員
静岡県永明寺 住職
加藤孝正



事務局員
愛知県地藏寺 副住職
浅井宣亮



事務局員
福島県昌建寺 副住職
秋 央文



事務局員
神奈川県梅宗寺 従弟
館盛寛行



事務局員
秋田県長禅寺 徒弟
金子宗元



事務局員
宮城県城國寺 徒弟
菅原研洲



事務局員
東京都大龍寺 副住職
太田賢孝



事務局員
ハワイ満徳寺 開教師
大谷有為



監 事
福島県天徳寺 住職
細川正善



監 事
東京都祥雲寺 住職
西沢応人

SZIワークショップのご案内



六千人の命のビザ

—運命の50日間—

「日本のシンDLラー」杉原千畝夫人講演会

TRANSIT VISA
Seen for the journey
through Japan (to Surinam,
Curaçao and other
lands' colonies)
Consul du Japon
Kaunas

第二次世界大戦中、ナチスドイツの迫害から行き場を失ったユダヤ人難民に対し、当時の本国政府の指示に反して、自らの判断で通過ビザ（査証）を発給し、約6000人のユダヤ人の命を救った、故杉原千畝元リトアニア領事代理は、「日本のシンDLラー」と評され、1986年に没した後も、その人道主義・博愛精神に満ちた功績は高く評価されている。

この杉原氏の行為は、仏教等の普遍宗教に於ける「慈悲」の理念や、特に大乘仏教、そして曹洞宗に於いて重要視される「利他行（自らの利益を追求する事なく、他者の利益・救済のために努め励む行い）」、「自未得度先度他（自らが未だ救済されておらず、苦境・逆境に立たされても、まず先に他の者を救済しようと努めること）」の精神等、仏教のエッセンスを凝縮し、具現化したものと表現しても過言ではなく、特に、ナチスドイツによるホロコーストに抗するかたちで、ユダヤ人難民を救済した立場は、今日に於ける国際的な課題とも言うべき「人権」的見地に於いても、極めて高く評価されるべきものである。



主催：SOTO禅インターナショナル (SZI)

共催：曹洞宗大本山總持寺

後援：鶴見大学

講師：杉原幸子（故 杉原千畝夫人）

日時：2001年6月30日（土曜）

午後1時30分開場 午後2時開演

会場：大本山總持寺 三松閣 四階大講堂

会費：無 料（一般参加 自由）

お問い合わせはSZI事務局まで